

IAUD Newsletter vol.16 第7号(2023年10月号)

1. IAUD創立20周年記念特集 未来への提言⑦大島理事特別寄稿……………1
2. 衣のUDPJ フェーズフリーオンラインセミナー開催報告……………7
3. IAUD国際UD研究講座2023受講生募集のお知らせ……………12
4. UD検定オンライン初級第31回及び中級第20回開催のご案内……………13
5. IAUD 2023年10月の予定……………13



UD普及とUD創造を担う開発者育成を目指して IAUD創立20周年特集 未来への提言⑦大島理事特別寄稿



初の海外開催となった2013年7月香港でのUDワークショップの様子

日本初のUD推進団体であるIAUDは、2023年11月28日で創立20周年を迎えます。これも、IAUDの創立と発展にご尽力賜りました関係者の皆様、並びに日々の活動にご参加いただきました会員の皆様のご支援とご協力の賜物です。

創立20周年を迎えるにあたり、Newsletterでは「創立20周年記念特集 未来への提言」を連載しております。

7回目は、IAUD創立当初から特別ワークショップ「48時間デザインマラソン」事業にご尽力いただいている大島誠理事(名古屋学芸大学デザイン学科クラブ顧問)の特別寄稿を掲載します。

※寄稿内肩書は当時のものです。



大島理事

ユーザーと共にデザイン開発

IAUD主催の特別ワークショップ「48時間デザインマラソン」は、様々な生活パターンを持つユーザーとデザイナーが協力してチームを作り、48時間の間にユーザーの日常生活と一緒に観察し、問題を発見して解決策を提案する、複数のチームによる競争設計です。

国際UD宣言2002でうたわれた「一人一人の人間性を尊重し、使い手中心の考え方を重視したものづくりや、社会環境づくりを目的とした研究」の推進を軸に、UDの探求と普及、将来のUD創造を担う開発者の人材育成を目的としており、これまでに全国各地で13回開催しています。



特別ワークショップ「48時間デザインマラソン」の流れ

第1回48時間デザインマラソン開催へ

IAUDが48時間デザインマラソンを事業活動に取り入れたのは、「第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議2006in 京都」からでした。

IAUDは2004年と2005年に、ユーザー参加型のUD開発プロセスを学ぶ「UDワークショップ」を金沢美術工芸大学の荒井利春教授監修のもと、横浜で開催しました。

そして、2回にわたり開催したこの「UDワークショップ」と2005年に英国王立芸術大学院ヘレンハムリン研究所が「Include2005」で実施した「24時間インクルーシヴデザインチャレンジ」との連携企画として、京都での国際会議において特別ワークショップ「第1回48時間デザインマラソン」を開催することになりました。



UDワークショップ監修の荒井教授

ユーザーとの体験を通じて課題発掘

初めての試みとなった「48時間デザインマラソン」は、本企画の提案者であるヘレンハムリン研究所のジュリア・カシム氏と連携し、監修には荒井教授をお迎えして実施されました。

英国からのデザイナー5名をチームリーダーに、地元京都の多様な身体機能特性を有するユーザーや会員企業のデザイナーなど各チーム7~8名からなる5チームが編成されました。



英国からのデザイナーと大島理事
(写真左)とカシム氏(左から3人目)

また、デザイン教育の場でもあることから、立命館大学と京都大学、九州大学からの学生ボランティアもアシスタントとして各チームに1、2名配置しました。

初日にはオリエンテーションが行われ、翌日に各チームはユーザーと共に京都市内へ出かけ、ユーザーの家や作業場などを調査しました。ユーザーの日常は、デザイナーには初体験の連続でした。

その後、ワークショップ会場の立命館大学国際平和ミュージアムで調査結果を議論しました。各チーム共、ユーザーとの意見交換を重ねながら、アイデアを出し合い、絞り込んでいきます。

その際のハードルは言葉でした。リーダーとの英語によるコミュニケーションには苦労がありましたが、皆が根気良く、意思疎通を図っていました。

岡本一雄会長のご視察も頂きながら、調査からアイデア発想へと進んでいきます。アイデアを分かり易く説明することも大切です。プレゼンテーション画像を準備し、実演も兼ねたユニークなプレゼンテーションテクニックが期待されました。

中には、畳の部屋に座布団で長時間頑張るグループも。各チームとも何とか最終日夕方のプレゼンテーションに臨みました。



京都大会の市場調査(上写真)
岡本会長(下写真左から2人目)
も視察したチームごとの作業風景

大盛況だったプレゼンテーション

プレゼンテーション及び表彰式は国際会議会場である京都国際会館で、約250名近くの聴衆の前で実施されました。

各チームは6分ほどの持ち時間の中で、48時間を使って作り上げたアイデアについて、工夫を凝らしたスライドの数々を用いながら自分たちの思いを発表しました。ユーザーもチームと一体となって参加しました。

その後、聴衆による投票で「ベストデザイン賞」「プレゼンテーション賞」が選ばれるという方式は、参加メン

バーや運営スタッフである我々にとってフェアであり、新鮮でもあり、会場の盛り上がりは、この国際会議の最終プログラムを飾るに相応しいものでした。

ユーザーと共に市場調査を行い、アイデア出しやプレゼンテーションにゲームの手法を持ち込むことによってワークショップを活性化させるこの手法は、刺激的であり、参加した多くのデザイナーたちを目覚めさせました。

特筆すべきことは、「U-CONTROL」で「ベストアイデア賞」を獲得したチームが48時間デザインマラソンの後、提案のプロトタイプを製作し、視覚障害者のユーザーに届けて使用性の確認を行ってくれたことでした。

※「第1回48時間デザインマラソン」開催報告は[こちら](#)をご覧ください。



京都大会での表彰式

毎年全国各地で開催しながら改良

大変好評だった京都での「IAUD48時間デザインマラソン」はその後、全国各地で2018年まで毎年開催されました。

2007年には千葉県美浜市、2008年には「IAUDユニヴァーサルデザイン大会in東海」と合同で名古屋市、2009年には「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議2010inはままつプレイヴェント」と合同で静岡県浜松市において開催するなど、地域の特色や社会背景を考慮し、各地のユーザー団体と連携を強めながら進化していきました。

特に、2008年の東海大会では、総裁の寛仁親王殿下、山本卓眞副総裁、岡本一雄会長のご出席を頂き、中部地区ユーザーの方々と共に各チームが興味深い提案を行いました。

このように、ワークショップ委員会により毎年開催となった「48時間デザインマラソン」は、監修の荒井教授や担当理事と共に、更に進化したUDワークショップの姿を見据えて毎回改良を重ねていきました。

主な改良点は下記の5点です。

- ①ワークショップの中心となるリーダーの早期育成。
- ②ユーザーの参加意識を高めると同時に、調査段階で得た貴重な情報をワークショップ全体で共有。
- ③プロのデザイナーのスピードやテクニックを学べるよう、ネットワーク形成や振り返りの会による仕組みを考案。
- ④優秀賞獲得チームだけでなく、全チームが充実感を得られるような表彰方法を考慮。
- ⑤海外の研究機関との交流を継続し、各国のプロデザイナーとワークショップ活動を継続しながら手法の進化の機会を持つ。

UDワークショップ原型を形成

さらに、「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議2010inはままつ」では、再び48時間デザインマラソンと国際会議を同時開催することとなり、過去4年間にベストデザイン賞を受賞したチームリーダーを再招集して競うイベントとしました。

ワークショップ会場は静岡文化芸術大学で、これまで4回のデザインマラソンで育成されたリーダーたちはベテランとなり、若いメンバーの指導やユーザーとの対話、アイデアの着眼で経験を生かした運営を見せてくれました。

さらに、各チームメンバーは所属会社の先輩たちから48時間デザインマラソンのノウハウをヒアリングして参加したため、ワークショップは大変スムーズに進行することができました。

そして、参加した地元ユーザーと共に、浜松の市街調査からユーザーの日常生活までをきめ細かく観察しました。

1日目の終わりには、同行した学生ヴォランティアにより調査での気づきが各チームから報告されました。これは、視覚障害や聴覚障害、車椅子利用などそれぞれのチームに配属さ



東海大会プレゼンテーションをご覧になる
山本副総裁、寛仁親王殿下、岡本会長



浜松大会 市場調査の気づきを報告

れたユーザーの日常生活をワークショップ全体で共有でき、また学生ヴォランティアたちに発表の場を設けるといって我々の狙い通りの進め方となりました。

また、アイデア展開の面では、若きプロデザイナーたちが向上したIT技術とテクニックを駆使して、スピード豊かに案を練り上げます。

短時間ながら考案されたアイデアはリアリティーに富み、魅力に溢れたアイデアデザインが出揃いました。

さらに、プレゼンテーション技術も向上し、チーム全体で起承転結、すなわちアイデア開発のストーリーを表現する様々な知恵や工夫があり、プレゼンテーションそのものを楽しく演出してくれました。

プレゼンテーション及び表彰式は、国際会議会場である浜松 ACT CITY で行われ、聴衆の投票により「ベストデザイン賞」と「ベストプレゼンテーション賞」が決まりました。

また、その他のチームも甲乙つけがたいアイデアと48時間渾身の作業を讃えて、監修の荒井教授と運営スタッフ 浜松大会のプレゼンテーションと表彰式推薦による「チームシナジー賞」「未来技術賞」「チャレンジ賞」が授与されました。

翌日に開催された振り返りの会では、参加者全員から多くの感想が寄せられました。主なコメントは以下のとおりです。

- ・企業の枠を超えて真の創造力を試されており、非常に緊張感のあるエキサイティングな学びができた。(デザイナー)
- ・特殊なニーズはUDにはそぐわないと思っていたが、自分も参画できると感じられた。(ユーザー)
- ・企業のデザイナーと作業するという初めての体験で、アイデア展開から粘り強さまで近くで見ることができ、とても良い勉強になった。(学生ヴォランティア)

これらの貴重な意見は、我々が4年の間に改良を重ねてきたUDワークショップとして狙い通りの、またUDワークショップの原型を形成できた成果だと考えます。



IAUD主体の海外初開催ワークショップ

初の海外開催となったIAUDのUDワークショップは、2013年7月に香港で行われた「INCLUDE ASIA 2013」(香港デザインセンター主催)において実施した「Inclusive Design in Japan」です。

このワークショップは、48時間デザインマラソンの手法をINCLUDE ASIA 2013参加者へ伝え、調査の一部を実感してもらうために行われました。

テーマは「KID'S GOODIES(子供の為の道具)」とし、当日は香港及び近くの深圳市から約60名の参加者があり、関心の高さが感じられました。

4時間という限られた時間でしたが、日常の体験やニーズを積極的に出し合い、香港デザインセンターの強力なサポートもあり、言葉の障害を乗り越えてユニークな提案に結びつけることができました。

※「INCLUDE ASIA 2013」開催報告は[こちら](#)をご覧ください。



香港でのUDワークショップの様子

運営方法の更なる進化へ

このように、UDワークショップ手法の一つである48時間デザインマラソンは当初から長い間、IAUDの主要な活動として展開され、荒井教授や担当理事、そのスタッフや各地元ユーザーなどの理解と絶え間ない支援のおかげで、多くの経験者を輩出することができました。

経験者たちはその後、それぞれの企業で展開されているデザイン活動で活躍し、多くの優れたデザインを生んでいることでしょう。

UDワークショップ活動の根幹となる部分は2つある 香港のワークショップで講演する大島理事
と
思っています。一つはユーザー参加型のワークショップであること、もう一つは現地現物での調査と気付きということです。この2つが、デザインワークには欠かせない重要な要素であるといえるでしょう。

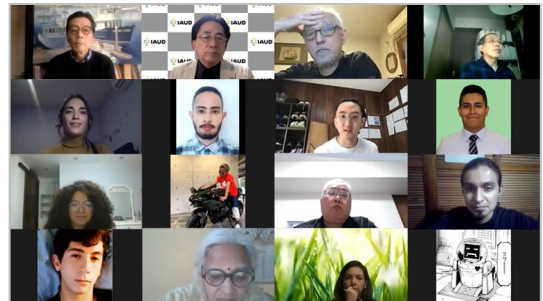
しかし、近年はパンデミックの影響によりこの2つの要素を織り込めずにワークショップが開催されたことがありました。急速に進化したリモート技術力によって、世界中のどの地域とも瞬時に繋がることができているのですが、オンラインによる対話や映像だけでは情報が不足します。

プランナーやエンジニア、デザイナーたちがユーザーと直接会い、行動してインスパイアされるリアルな体験が必要だと感じました。

これからは、ワークショップ運営方法をさらに進化させる時期に来ていると思います。例えば、IAUDの持つグローバルなネットワークをフルに活用しつつ、コロナ禍によって進化したオンライン技術を今後も利用していきます。

そして、世界の各地域にユーザーとクリエイターによるローカルなワークショップグループを形成しておき、その活動をリモートで結び競い合っ問題解決をしていく方法です。

コロナ禍が沈静化し、このような枠組みで新たな48時間デザインマラソンが開催出来ることを願いながら、この振り返りレポートを終わります。



「第8回国際UD会議2021 in ザ・クラウド」
で開催されたオンラインUDワークショップ



災害時の衣服はどうあるべきかを学ぶ

衣のUDプロジェクト フェーズフリーオンラインセミナー開催報告

The poster features a central title '災害に関する衣料支援と衣服デザイン' (Disaster-related Clothing Support and Clothing Design) and a subtitle '~イタリアから学ぶ我が国の避難所支援の現状と課題~' (~Learning from Italy about the current status and issues of disaster relief support in our country~). Below the title, it states the goal: '避難所で亡くなる人をゼロに' (Zero people who die in disaster relief camps). Event details include: [DATE] 2023.8.31.Thu, [START] 14:00, [PLACE] ZOOM (ONLINE), and [FINISH] 15:30. The organizers are listed as 主催 (Organized by) IAUD and 共催 (Co-organized by) UNIFA. Two speakers are featured with circular portraits: 水谷 嘉浩 (Mizutani Yoshio), Jパックス株式会社 代表取締役社長 (CEO of J-Packs Co., Ltd.), and 谷 明日香 (Tani Asuka), 大阪樟蔭女子大学 准教授 (Associate Professor at Osaka Shoin Women's University). At the bottom, it lists the main sponsor as 一般財団法人 国際ユニバーサルデザイン協議会 衣のUDプロジェクト (International Universal Design Association Clothing UD Project) and the co-sponsor as NPO法人ユニバーサルファッション協会 (NPO Universal Fashion Association).

オンラインで開催されたセミナー「災害に関する衣料支援と衣服デザイン」

おしゃれで機能的、安心・安全で非常時にも役に立つ「フェーズフリーウェア」を研究している衣のUDプロジェクトは、8月31日(木)にオンラインセミナー「災害に関する衣料支援と衣服デザイン～イタリアから学ぶ我が国の避難所支援の現状と課題～」を、NPO法人ユニバーサルファッション協会と共催で開催しました。

当日は、同プロジェクトメンバーや研究者、高齢者支援団体、マーケティングや健康食品系企業など多様な分野から30名が参加する中、Jパックス株式会社代表取締役社長の水谷嘉浩氏と大阪樟蔭女子大学准教授の谷明日香氏をお迎えし、災害支援と衣類に関して講演していただきました。

今号のNewsletterでは、セミナーの開催概要を同プロジェクトの森秀男主査が報告します。

平常時・非常時どちらにも役立つ「フェーズフリーウェア」

誰もが着る喜びを実感できる社会づくりを目指して活動している衣のUDプロジェクトは、2023年度は3つのテーマ、「フェーズフリーウェアの研究」「お洒落で機能的なUDジーンズ・パンツの研究開発」「UD視点で読み解く日本独自の現代ファッション推進」について取り組んでいます。

「フェーズフリー」は、平常時(日常時)や災害時(非常時)などのフェーズに関わらず、両者に活用できて、より安心で安全な生活をつくるための考え方と手段です。つまり、フェーズの間にある垣根を越えて、どの様な状況でも私たちの命や生活を守るデザインです。

「フェーズフリーウェア」は、普段着ている服がそのまま災害時にも安心・安全な服として着用できるものです。同プロジェクトは、2021年度より「フェーズフリーウェア」について研究しており、専門家を招聘してセミナー※をこれまで開催してきました。

今回のセミナーは、災害時の衣服はどうあるべきかを学ぶために計画され、「災害支援衣類研究会」の主要メンバーで、災害支援と衣類に関するエキスパートである水谷氏と谷氏に講演していただきました。

※2021年10月実施のオンラインセミナー「サステナブルなフェーズフリーデザイン」開催報告は[こちら](#)をご覧ください。

■講演1: Jパックス株式会社代表取締役社長 水谷嘉浩氏

まずは水谷氏より、避難所対策世界のイタリアを度々視察し、日本の現状を検証した結果について講演がありました。講演の要約は以下のとおりです。



水谷氏

立ち遅れている日本の避難所対策

日本は避難所対策で極めて立ち遅れている。例えば、災害時のトイレは自治体の備蓄数が限られており、圧倒的に不足している。また、従来の簡易トイレは和式で狭い、臭いが強い、床が汚い、手洗いなし、段差あり、高齢者が使いづらいなど不便で不衛生。最近では快適トイレもあるが、まだまだ不十分の状態。

2018年の西日本豪雨災害では、菓子パン、おにぎり、カップ麺などの配給がほとんどで、栄養の偏りや野菜不足で便秘になる人たちが出た。ボランティアによる炊き出しもあるが、限定的。

雑魚寝の解消が必須だが、段ボールベッドの導入に時間がかかっている。車中泊生活や避難所では、長時間同じ姿勢、水分不足で脱水、ストレスや怪我がもとで発症するエコノミークラス症候群^{*}で肺血栓ができ、死亡するケースが見られる。亡くなるケースは必ずしも高齢者ではなく、40～50歳代の比較的若い女性が多い。

さらに、災害発生時でなく、その後の避難生活や避難所でのストレス等で亡くなる「災害関連死」が非常に多いことも問題で、平成の30年間で約5,000人もいる。

報道によると、多くの災害では住民の避難率は5%以下であることが多い。避難所は辛い環境、粗末なトイレ、硬い床に雑魚寝、冷暖房なし、不便、不潔、寝られないなどの理由で、日本の市民は避難所に行かない、行きたくないと思っているようだ。一方、あらかじめ段ボールベッドを設置した避難所では、以前と比べて避難者が10倍になった自治体もあった。

日本の災害対策基本法では、市町村が住民の安全に責務を負う体制となっている。その結果、国内にある1,741の各自治体がバラバラに運営しており、避難所も1,741パターンあることになる。

※エコノミークラス症候群: 動作が少なく長時間同じ姿勢でいると下肢(足)が圧迫され、血流が悪くなり血栓(血のかたまり)ができやすくなり、できた小さな血栓が肺の静脈を詰まらせてしまうことで発症。

避難所環境を改善するTKB48

避難所環境をよくする必須の要素は、T:トイレ、シャワー(衛生)、K:キッチン、食堂(栄養)、B:ベッド、生活空間(睡眠)で、これらを48時間以内に揃える「TKB48」が非常に重要、とされている。

避難所対策世界一 イタリアの状況

イタリアの事例 避難所の環境はTKB 48^(h) 全て移動式

T = トイレ、シャワー
(衛生)

K = キッチン、食堂
(栄養)

B = ベッド、生活空間
(睡眠)



イタリアのTKB

イタリアの避難所では、内務省管轄のイタリア市民保護局が統括センター機能を持っており、国家レベルで運営されている。

全国各地に巨大な備蓄拠点が数多く存在しており、長期避難生活が不自由なく過ごせる資機材を備蓄している。また、イタリアのカジュアルファッションブランド「ベネトン」の寄付による防寒着などの衣服も見られた。

イタリアのTKBに関しては以下のとおり。

T:コンテナトイレ、シャワー、洗面台が全国に数多く備蓄。

K:加工品でなくプロの料理人が作る温かくおいしい食事を提供。ワインやエスプレッソも。食堂を設置し皆と楽しく食事ができる。キッチンカーを数多く配備。

B:家族単位で割り当てられてプライバシーも守られるテントを数多く備蓄。

臨床心理士が子供の心的外傷後ストレス障害(PTSD)*予防活動。子供の遊び場や母子の安全スペースも確保。赤ちゃん用ベッドもある。

※心的外傷後ストレス障害:トラウマになる圧倒的な出来事(外傷的出来事)を経験した後に始まる、日常生活に支障をきたす強く不快な反応。

イタリアが学んできた長い教訓の歴史

イタリアでは地震、水害、火山噴火など日本以上に災害が多く発生する。1980年には南部のイルピニア地震で約3,000人が死亡、10,000人が負傷し、国家的大問題となった。イタリア政府は、救援対策は失敗だったと認め、その反省を元に1982年に国家機関「イタリア市民保護局」が設立された。

そして、人間の生命、健康、インフラ、国の資産、住居、動物、環境等を災害から守るために、質の高い政策が実施された。

今では、「避難所の環境が原因の死亡や災害関連死はあり得ない」と誰でもそう答えるほどの共通認識となっている。

48時間以内に、避難生活の避難所でTKBが設置される。職能支援者*や約4,000のボランティア団体、約300万人の一般ボランティアが登録している。

ローマにある市民保護局本部では、軍、消防、警察、医療、ボランティア団体などが同じフロアで24時間365日、イタリア全土をモニタリング。インターネットでボランティア団体に所属している個人にも情報を共有しており、縦割りは無い。

家族ごとに冷暖房完備の20㎡テント、すべての避難者に簡易ベッドと料理人が調理した温かい食事も提供される。

宗教的な背景として、カトリック精神による“隣人を愛する”という倫理観があるのかもしれない。約800年前から活動しているボランティア団体も。

被災自治体の職員も被災者であるから、避難所運営をしない。また、全国的に避難所の標準化が進んでいる。

※職能支援者：職業を持った一般住民で、災害支援活動を希望しており、災害時の対応訓練を受けてからボランティア団体に登録している人々。料理人や運転手など、被災地で自らの職業を生かした支援を行う。

日本の避難所環境を改善するために

日本の災害救助法の7日間の括りは、現実と乖離している。救助法が7日ごとに延長され、それが数ヶ月以上続くのが現状。法の改善が求められる。

全国に1,741ある市町村がそれぞれ避難所を運営しているが、支援の標準化が求められる。

さらに、避難者を避難所で患者にしない(精神と肉体的ダメージを与えない)ために、関連死を防ぐ視点が必要。

災害支援の市町村任せには限界があり、民間を含めたオールジャパン体制でTKBを導入する仕組みを作る。外交や防衛と同等の国家的レベルに位置付けることが重要。そのためには、防災専門省庁の設置が必須。先進国だけでなくアジア諸国にもあるが、日本だけがない。

たった一人の犠牲者も出さない強い意志

イタリアから学んだことは、「たった一人の犠牲者も出さない」という強い意志。避難所での二次的な健康被害をゼロにする決意とその共通認識がある。

また、災害支援のための歴史的な哲学があり、あらゆる専門職が関わって仕組みを作り上げている。

敵は災害であり、守るのは国民であるという自覚。しかし災害よりもっと怖いのは、被災者にとって「本当の敵は絶望」であること。その「絶望」から被災者を守るために、国レベルで高い完成度の標準化がなされている。

■講演2:大阪樟蔭女子大学准教授 谷明日香氏

続いて、谷氏が災害時における衣環境について講演しました。講演の要約は以下のとおりです。

衣服は簡便で効果的な体温調節補助機能

「衣食住」は、生活の3本柱である。しかし、災害時における衣環境に関する報告は、食生活や住環境の報告と比較し極めて少ない。



谷氏

災害時に全域停電(ブラックアウト)になると、多くの場合、寒さとの戦いとなる。さらに、津波や豪雨などにより体が濡れていた場合は、水分を介した気化熱により体温の放熱が促進され、生命の危機にもつながる事態になりかねない。

私たちの身体は、自律性体温調節反応により皮膚血管収縮やふるえ・非ふるえにより熱産生^{※1}し、熱平衡を保とうとするが、加えて、空調による人工環境や衣服の着脱といった行動性体温調節反応が果たす役割も大きい。

なかでも、衣服の着脱は、非常に簡便で効果的な体温調節補助機能となる。

※生体内における熱産生システムは、骨格筋の収縮(いわゆるふるえ)によって熱が作られる「ふるえ熱産生」とそれ以外の機構による非ふるえ熱産生に大別される。

災害時における衣環境の現状

調査したところ、避難所に衣類は備蓄されていないことがほとんどで、市販の防災バッグの大半にも着替えの衣類が含まれていないことが明らかになった。^{※1}。衣類については、個人の備えが必須なのである。

では、何をどれくらい備蓄していたら良いのだろうか。3日分の衣類を備えておくことを提唱している文献もある。^{※2}

右写真のように、それらは1日毎にそれぞれジッパー付きビニール袋に入れ圧縮するなど、雨や津波から保護するようにしておく心安だ。

もし何も備えていなければ、着の身着のまま、避難所や防災バッグにあるビニールシートやアルミシート、毛布などに包まり過ごすことになるだろう。

そこで、避難所へ避難してきた人が、衣服の代わりにそれらのシートを駆使して体温維持に努めた際の保温力や衣服内温湿度の測定を行った。その結果、衣服とシートの間は高温状態となり、蒸れが生じることが明らかとなった。蒸れは、シートの内側に結露を生み、それが外気温により冷やされると、低体温症を助長することが推察される。

現在、薄くて暖かいポータブルな備蓄防寒衣服の開発に向けて研究を進めている。そのためには、機能性とデザイン性を兼ね備えた衣服デザインが求められる。

※1:谷明日香,小野寺美和,竹本由美子(2022) 備蓄物資を活用した防寒対策の検討(日本家政学会関西支部第73回研究発表会要旨集)

※2:小柴朋子(2012)災害に備えるために一備蓄用衣料のあり方について考える(日本衣服学会誌55、1、15-18)



1日分ずつパッケージ化した衣類の備え

災害で命をなくす人がゼロの社会へ

講演の後、質疑応答が行われました。参加者からは、「学びの多いセミナーだった」「イタリアの災害避難所対策と日本の遅れた現状との違いがショックだった」「備蓄用の防寒衣服の研究に期待したい」などのコメントがありました。

今回のセミナーでは、避難所に関する先進国イタリアの状況、災害を視野にした安全・安心な衣服デザイン、さらに我が国の被災者支援の現状や備蓄衣料のあるべき姿などを話していただきました。

講演と議論を通じて、みんなで災害によって命をなくす人がゼロになるような社会を作るための、示唆やヒントを得ることができました。

今後は、ユニヴァーサルなフェーズフリーウェア研究について、イラストレーションを主体とした冊子を作成し、IAUDのホームページにアップして、世界中の誰でもアクセスできるようにする予定です。

フェーズフリーウェア掲載！冊子「衣・着るⅢ 衣とイノベーション編」

より多くの人に衣の UD を理解してもらうため、同プロジェクトは衣の UD 普及活動冊子「衣・着るⅢ 衣とイノベーション編」を2021年7月に発行しました。

本冊子は、新しい技術開発とデザイン、社会環境、生活スタイル、マーケットとの関係性などを研究する目的で編集され、5つあるサブテーマの1つを「衣とフェーズフリー」としました。

災害発生時に速やかに命を守る行動ができる服や、視認性が高くおしゃれで安全性の高いウェアなど、日常と非日常を区別しない服を紹介し、災害から身を守る「フェーズフリー服とフェーズフリー社会を創る」というプロジェクトの活動方針を示しています。

IAUD 事務局では本冊子を無料で配布しております。ご希望の方は[こちら](#)をご覧ください。



冊子「衣・着るⅢ」



リカレント教育や経営幹部養成プログラムに活用できる IAUD国際UD研究講座2023受講生募集のお知らせ

IAUDはこの度、より研究教育的な事業として「国際UD研究学院」を設置し、2023年10月より「IAUD国際UD研究講座」を開講いたします。

UDは障害者や高齢者向けのデザインだけを意味するものではありません。UDの領域は拡大進化しており、人権意識や社会の持続可能性を考慮したデザイン経営の実践こそがいまやUDの本質です。

「IAUD国際UD研究講座」では、新たなUD思考を身につけるリカレント教育やリスキングのコースを、オンライン・オンデマンドで提供します。多様なUD領域の中から受講者の個性や能力に応じた選択肢を準備しており、基礎と専門のメソッドを習得できるようなカリキュラムになっています。

現在、第1期(2023年10月～2024年7月)の受講生を募集中です。

開講は10月10日(火)ですが、終了した選択講義はオンデマンドで視聴できますので、いつでも申込が可能です。なお、IAUD会員および学生は受講料が割引になります。

ぜひ、自己研修や経営幹部養成プログラムの一環として活用いただきますよう、皆様のご参加をお待ちしております。

※IAUD国際UD研究講座の募集要項やお申込みは[こちら](#)をご覧ください。

※IAUD国際UD研究講座2023第1期シラバスは[こちら](#)をご覧ください。



国際 UD 研究講座の講師陣。左から古瀬敏氏、川原啓嗣氏、久保雅義氏、相良二郎氏、大島誠氏、益田文和氏



在宅で好きな時にUD資格習得

UD検定オンライン 初級第31回及び中級第20回開催のご案内

IAUDは、「UD検定初級第31回」「UD検定中級第20回」をオンラインで開催します。

「UD検定・初級」は、UDに関する基礎的な知識を学習する講習と力試し問題、検定試験(30分・50問)のセットです。問題は全て受講した講習内容から出題されます。

「UD検定中級」は、力試し問題と検定試験(70分・129問)を受けていただきます。試験問題は、公式テキストブック「知る、わかる、ユニヴァーサルデザイン」に準拠して出題されます。受験される方は事前に公式テキストブックをご購入し、ご自身で学習された後に試験をお受けください。



公式テキストブック

初級、中級とも合否は検定試験終了後すぐに判定され、合格者には認定証を発行します。

「UD検定オンライン初級第31回」の申し込み受付は10月12日(木)から11月9日(木)まで、「UD検定オンライン中級第20回」の申し込み受付は10月17日(火)から12月20日(水)までです。

申し込み方は近日中に[IAUD公式サイト](#)に公開します。この機会にぜひ、ご利用ください。

※「UD検定オンライン第1回初級」開催報告のNewsletterは[こちら](#)をご覧ください。

※「UD検定オンライン第1回中級」開催報告のNewsletterは[こちら](#)をご覧ください。

IAUD 2023年10月の予定

月	火	水	木	金	土	日
2	3	4	5	6	7	1/ 8
9 スポーツの日	10 国際UD研究講座 開講	11	12 UD検定初級 申込開始	13	14	15
16	17 UD検定中級 申込開始	18	19	20	21	22
23	24	25	26 14:50~ 衣のUDPJ @オンライン	27	28	29
30	31					

次号は2023年11月上旬発行予定

特集：創立20周年記念特集⑧

一般財団法人国際ユニヴァーサルデザイン協議会 事務局

<http://www.iaud.net/>

e-mail:info@iaud.net

Instagram: [iaud.info](#)

LinkedIn: [international association for universal design](#)